

# 「天の園」から学ぶ

第 11 期 郷土学部 B 班



景色でお腹のくちくなるような子供に育てます。

心 夕焼け

メンバー 浅見 喜美枝 伊藤 尚史 岩下 栄子 太田 喜久江  
榎本 英男 滝沢 東三 藤田 正子 友枝 翼  
長嶋 スミ子 ○松本 重敏 森田 智子 ◎山崎 武夫  
◎：リーダー ○：サブリーダー



# 目次

- 1 「天の園」 マップ
- 2 選定理由
- 3 課題の取り組み方・調査の進め方
  - 3-1 まず小説を読もう
  - 3-2 小説の舞台を歩いてみよう
- 4 雲
- 5 「天の園」と唐子の自然
  - 5-1 唐子の自然
  - 5-2 唐子の草木と生物
  - 5-3 唐子地域の習慣
  - 5-4 唐子の今昔
- 6 「天の園」の家族
  - 6-1 小学校の入学
  - 6-2 中学校の入学
  - 6-3 貧乏物語
- 7 自然の中の遊び
  - 7-1 初めての川遊び
  - 7-2 鳥刺（ホオジロ）、メジロ取り、
  - 7-3 子供たちは変わっていない
- 8 時代背景
  - 8-1 養蚕について
  - 8-2 道路と交通
- 9 自然散歩
  - 9-1 岩殿散歩
  - 9-2 ロマンを求めての旅
- 10 まとめ
- 11 今後の取り組み・お礼



# 「天の園」マップ



## 2 選定の理由

小説「天の園」は明治末期から大正初期に当市内の唐子地域で作者が過ごした少年時代の日常多感な出来事をモチーフに、母親・友達・まわりの人々・美しい自然・風土、ほどよい貧乏等との係わりが細やかに描写されており、これらと対話しながら成長して行く子供たちの物語で日本三大児童文学（路傍の石・次郎物語・「天の園」）に位置付けされている。

現代の殺伐とした世相に一番欠けている人間愛、助け合いの精神がやや失われつつある中で、B班は「天の園」を課題として取り上げ、その中心は家族・子育て・自然・道路交通・子供の遊び・養蚕、に絞り、読み、学び、歩いて現代と対比考察することでその成果を現代に発信出来ればとテーマに選定した。

## 3 課題の取り組み方・調査の進め方

「天の園」については地元の皆さんをはじめたくさんの方々により、調査研究がされており、我々としてどのような切り口で入っていったら良いかと大変悩むところでした。きらめき市民大学学生として、また課題研究として、いくつかの切り口案がでましたが、今回は地元唐子の地および保の育った時代と現在との比較を考えながら、少し距離をおいた見方を基本的なスタンスとして考え、各担当者毎に原案作成することでまずスタートすることにしました。そのため「天の園」そのものからすると多少かけ離れていると思われるところもあると思います。

### 3-1 先ず小説を読もう

メンバーの中には小説「天の園」を読んでいる人も、読んでいない人もいたので先ず小説を各自読もうということになった。

### 3-2 小説の舞台を歩いてみよう

「天の園」に出てくる唐子村は、保の父徳三郎が非常に気に入っていて、南フランスの風景に似ていると言う。保の母かつらは、「景色でお腹がくちくなるような人間に育てます」と言わせた。そのような唐子を皆で歩いた。時には天の園を研究しておられる、「茜会」の皆さんの説明を受けたりしながら歩いた。小説の舞台唐子は、その頃の自然を多く残してしてくれた。



## 4 雲

題名を雲に統一したのは、みんなが散り散りになり、年をとっても雲を見て暮らしてほしいと願ったゆえんである。(第6部 あとがきより)



### 雲の学校

二階の窓から外をながめた。水門一水車が見えた。二階へ上ると、まるで雲の学校のようなだった。長屋門の大ケヤキのこずえが、目の高さの少し下で、その上の高本山坂東山が、手をつないだように乗っかっているのだ。(第一部 P.243)



### 雲は子どもの夢の宝庫

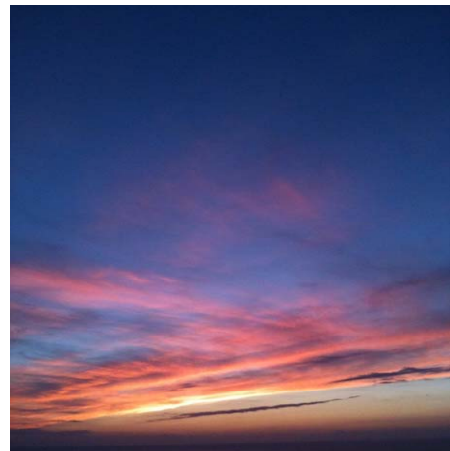
悲しい時、空を見ます。いつも僕は思っていたとおり空には池があったんです。

1キロも2キロもあるでっかいヒゴイ、マゴイに乗って秩父山脈から東も空にすいすいと飛びまわりました。(第四部 P.75~77)



### 白い雲

彼は、自分がモグラなら、手塚月男は空の白い雲だ、というふうに思った。地べたをもぐって歩く貧相なやつと、ゆうゆうと空を飛ぶ雄大なやつとにわけて考えてしまった。(第二部 P.11)



### 夕雲

それは雄大な、サクラ色したかすみの中の雲だったが…雲が笑い出した、と保は思った。何か言っているようなので耳を澄ました、そしたら、もっと小さいころからお前はこんなことは、よくあったじゃないか、と教えてくれた。雲は心の窓を開いてくれる…いまだって…と保は思った。

(第六部 P.286)

## 5 「天の園」と唐子の自然

### 5—1. 唐子の自然

唐子地域は埼玉県の中央に位置し地形的には右図の通りで、小説に描写されている山、川、橋、等の風景を調査結果を踏まえて以下記載する。

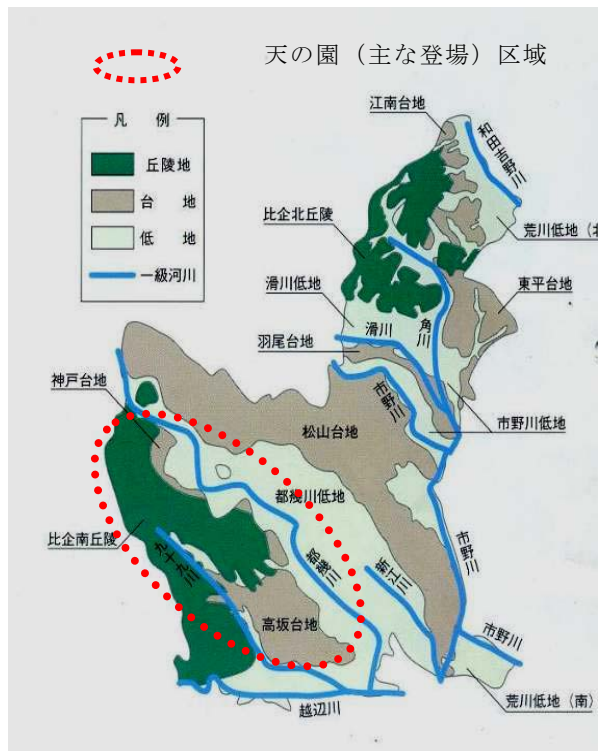
#### (1) 山について

◆**坂東山**（標高93.6m）当時（明治の末から大正初期）は坂東山のとっぺんから、都幾川、村落、田圃を一望できたが、ゴルフ場開発また、昭和28年にセメント用粘土採掘の鉱山が開設され昭和の末期まで採掘されていたが、原料の枯渇もあり近年まで放置、原野の状態にあったが最近になって工業団地（葛袋工業団地）として再開発され当時の面影はない。天の園では2年生の夏「ぐみ」とりに出かけ大蛇に遭遇し退散等が登場する。

◆**高本山**（標高112.5m）昭和41年6月高本山配水場が設置（貯水タンク）され頂上には自由な立ち入りが出来ない。小説では第5部で源八たち4人がメジロ取りにでかけて山鳥と間違え、チャボ2羽捕まえる、これが事件に発展しニワトリが襲撃される。結末としては保と源八の友情がさらに深まる。

◆**鞍掛山**（標高90m）第三部「ヒゴイの旅路」に描写されており精米屋に行く途中で都幾川は、ここら辺りから表情が一転し断崖絶壁、巨岩がごろごろした風景が見られる景勝地である。

◆**岩殿山・物見山**（標高135m）第四部「生きて居る山脈」で「保・ふゆ子」が語り合う場面が描写されている。当市でも1番の高い山で関東大平野・筑波山・秩父の山々・浅間山・日光男体山などが見える眺望の良い場所であるが樹木の生長、周辺環境の変化で様変わりし残念である。



東松山環境マップから引用一部追記  
(東松山市役所環境経済部環境保全課発行)



春の駒形公園

## (2) 川について

◆都幾川は都幾川町大野地区の高篠峠附近を源流とし、嵐山町二瀬橋附近で支流の槻川と合流、左岸側の崖は都幾川により開析された河岸段丘である。東松山市に入り、関越自動車道を越えたあたりから両側を高い堤防で挟まれるよう河川改修され、河川域も運動公園など都市近郊河川の様相を見せ、川島町長楽において越辺川に合流する。

また、都幾川町を境に東松山市内に架かる橋は大小合わせて11ヶ所あり「天の園」に登場する主な橋は鞍掛橋（冠水橋）・神戸大橋・稲荷橋（オトウカ橋）・唐子橋・で当時の風景から大きく姿を変えている。

水系流域には三波溪谷・慈光寺・嵐山溪谷・丸木美術館・駒形公園および河川河原を利用したキャンプ場など観光施設がある。



鞍掛橋

### 5—2. 唐子の草木と生き物

(1)唐子の四季自然風景の変化として丘陵に沈む夕陽・夕やけ・小説の副題にもなっている雲の風景、田圃・等など。

(2) 唐子の巨樹樹木について

(3) 草花

(4) 生き物のほか、保が熱中した昆虫類

以上であるがその詳細については小説「天の園」はじめ、多くの文献、資料が出版されており、それらを参照するとどめた。



稲荷橋（オトウカ橋）の夕焼け

### 5—3. 唐子地域の習慣

神社、寺などの諸行事 唐子地区の夏祭を見学したがいずれの箇所も地域住民のコミュニティの場であり大事に保存されているが伝統文化財としての継承に苦慮しているように感じられた。また各種の講、「ふせぎ」その他については一部の地域で、行われているものの、既に途絶えた諸行事、習慣も多い。



レストラン「天の園」より都幾川を望

### 5—4. 唐子の今昔

保少年が過ごした明治末期から大正初期の時代「天の園」を推測しながら現

代の唐子を大まかに対比して見るに、居住年齢層の変化もあり、当時の状況は定かでないが、概ね以下のとおりである。

- (1) 居住区現況が大幅に変わり建物など当時の面影が残り少なくなっている。
- (2) 小説に描写されている巨樹類については既に無くなっている
- (3) 坂東山・高本山・物見山などは時代に沿った開発などもあり自然環境形態が大幅変化している。
- (4) 都幾川流域についても人工的に手が加えられているところもあり（橋など）、又、子供たちが自由に遊び泳げる場所が少なくなっている。（遊泳禁止など）
- (5) コミュニティ形態の変化
- (6) 道路、交通網が大きく変わり生活環境が変化した（車社会）
- (7) 農家（養蚕など）を主とした生活環境が時代と共に変化し、外で働き生活を維持する家庭が多くなった。（専業農家の減少、大家族から小人数世帯に核家族化）

## 6 「天の園」の家族

「天の園」では、①程よい貧乏 ②美しい自然 ③おふくろの愛情が子供の成長に大きく影響している。これらのテーマを本書の中で多く取り上げられているが、その一部を取り上げ参考に致したい。

### 6—1 小学校の入学

唐子に来てから4年目、今日という日を誰より待ったのは母のかつらであった。今朝は親子3人、朝日の差し込む東座敷でゆっくり朝食をとった。お膳の上はいつもと違い真っ黒な麦ごはんではなく、お赤飯に15センチもあるおかしら付きのイワシが1匹ついている。それに味噌汁の味が特別である。かつらは保の入学式に行く準備をしているときも涙が出て仕方なかった、それほど保の入学が嬉しかったのだ

——第1部・第1章・こんな入学式より——



病気の夫養生のため5人の子供を連れて、故郷唐子に帰ってきた母かつらであるが4年の間に夫と2人の子供を亡くしてしまい、家族に男一人となった保への期待が大きかったとおもわれる。程良い貧乏の中でお赤飯と15センチのイワシをお祝いとして作る側も、いただく側も、心のこもった料理に喜び



と感謝の気持ちがあふれている。現代は、食べるものがいつでも余るほどある。子供たちに物の有難みが薄れている。

物を大切に作る、有難くいただく心を教えよう。

## 6—2 中学校の入学

保は唐子小学校よりただ一人川越中学校に合格した。家に帰ると母かつらは久仁子を製糸会社に入寮させるため出かけていた。二人は保の合格を電報で知り、抱き合っ泣いたと手紙に書いてあった。ムク爺さんからは祝いの10銭と喜びの手紙があった。アイさん乞食からはセルロイドのペン軸であった。これももったいないような気がした。笠間の剛平伯父さんからは約束の靴であった。但し、女子大の娘のものを改造して使うようにと書いてあった。母かつらからは消防組から譲り受けた帽子を工夫して使うようにと教えていた。

——第6部・第7章・心のあらし、雲の恩より——



保が中学に合格して喜んでいる時、姉の久仁子は保の犠牲になって製糸会社に入寮しなければならなかった。久仁子は成績優秀であったので師範学校受験をやめたのは、保も母かつらもつらい思いであった。当時は家庭の事情で子供の進学を決めることは当たり前のようであった。現代では中学までは義務教育で家庭が経済的な面を心配することは殆どない。

ムク爺さんが10銭くれたのも保にとって大金であった。かつらの家は貧乏のため奨学金をもらうようにした。それは月3円であったので、10銭は奨学金の1日分だ。アイさん乞食がくれたセルロイドのペン軸、アイさんがどのような姿で保のために、これを買ったか考えると胸がせまる思いであった。乞食でもお祝いを送ろうとすることが、保の人柄がしのばれる。剛平伯父さんは銀行の頭取でもあり、高額納税者であるから本当はお金もちだ。しかし、お金の大切さ、物を大事に使うことを教えることがさらに大切だと教えている。



母かつらは1円以上する中学帽

は買えないので村の消防組の帽子を15銭で買いそれを工夫して使うようにと言っている。

保も少しは抵抗があったようだが、自分の立場を考えて快く改造している。私たちも戦後の混乱期、小学校、中学校を通学し、帽子、制服、教科書など兄や

保は姉久仁子が女学校行にかせてもらえないことに抗議してアイサン乞食と一夜を過ごす。

近所の上級生のものを貰って使った。食べ物も麦飯、イモ飯、野菜飯など普通であり、食べられることがありがたく、文句言わずに食べろと言われて育った。

現代は豊かになり新しいもの、高いものを使うのが当然のように買い、そして使い捨てていく。

苦勞して買っていただいたことを教え、大切に使うことを教えよう。

### 6—3 貧乏物語

保は、お面を取った。「これ、手紙だよ……講堂のおばさんからよ」  
<今夜手打ちうどんをつくりませんか。例のもの捨てないで置いてください。もらいに行きます。>保が何と書いてあるのとせがむのでかつらは隠さず話した。そして、<つくりますよ。たっぷり差し上げます>と返事を書き保に持たせた。

保が返事を持って行くとおばさんはくしゃくしゃな顔をしてありがとうと言った。

———第1部・第7章・希望の園へふみだすより———



保とお母さんはうどんのゆで汁を飲んでみる。

おろくおばさんは、もっと貧乏であった。米は無論、麦を買う金もなく、赤ちゃんに飲ませるものがないこともあった。そんな時、かつらに手打ちうどんのゆで汁を分けてくれと頼むのであった。保がなぜそのようなことをするのかと聞くので、かつらは保に理由を話した。「講堂んちでは、保の家のゆで汁でお腹をくちくするのだ。」保も「かわいそうだね！汁だけでなく、うどんも少しやるように」と言った。貧乏は、辛いことである。抜け出すことは簡単なことではない。自分たちよりもっと貧乏な人がある。しかし、貧乏の中でも自分たちで喜び、悲しみ、ともに考え、工夫することが出来るし、大切である。貧乏に負けてくじけないことが希望につながることを教えよう。

## 7 自然の中での遊び

**何が何でも子どもから奪ってはならないものは、生きている自然とそのなかの遊びと愛なる母である** 「天の園」第1部あとがきより

生きている自然と遊び、保たちの時代、このころの農村は自給自足に近い生活であり農作業も人力と牛、馬に頼った厳しいものであった。反面田畑は牛馬から出る堆肥によって豊かな田園風景が作り出された。

里山の草木は重要な燃料として利用され、落ち葉も腐葉土として農作物に利用された。

今はぼうぼうに茂っている土手の草なども私たちが子供のころは、毎朝草刈り《牛の朝食》に行ってそれから朝飯を食べて学校へ、これが日課であった。

こうして整えられた生態系、豊かな里山、土手など、最高の遊び場が用意されていた。ではどんな遊びをしたのか。自然の、野山を遊び場にした保たち—

## 7-1 初めての川遊び



夏休み、保は待った“そしてようやく保の願いがかなった。天下晴れて都

幾川の水遊びに本家の光忠につれてもらえるのだ。光忠（本家の長男、川越中学生）は保の母親からくどいほど頼まれた。リーダーの責任は重い、光忠は保に深いところへは入らないこと、そばを離れないことなど5つの訓戒をあたえた。

なにしろ川で泳ぐのは初めて、むやみに張り切った。—砂も、砂利も、小魚の銀の光も…ただことでない美しさだった。

岬へもどって、鉄忠、輝忠が鬼ごっこをしていた。それを上から眺めると、そのぐるぐる回りの浮き加減が、すごく楽そうで、誰にも自由にできそうに見えた。ただ足の裏をひらひらさせていれば、空に浮かぶ雲の子みたいに遊べるんだ…保は見とれた。

保は、<ゆめ坊主>になった、…ザブーンという音を自分の耳で聞いた。…アップアップと水を飲んでいて。—「タモ公ノバカヤロウ」と一言光忠にどならただけでことがすんだ。お母さんは一ちょこまか病には、かえっていい薬になった、と言っただけだった。

《第2部 P134 ゆめ坊主より《要約》 保護者なしでは禁止》

## 7-2 鳥刺し（ホオジロ）、メジロ取り、その他

(1) ある雪の日の放課後保たちは仲間と相談してホオジロ刺しに出かける、松葉杖のたつやんを助けての感動的な話である。メジロ取りは<オトリ>を入れた刺し子を木にぶら下げて離れて掛かるのを待つ、どちらも鳥もちを使う。

今では禁止されている遊びも自然の豊かだった当時は黙認されていた。

(2) その他馬乗りっこ、弓遊び、栄養係としての魚取り、竹馬、ひとり行軍など沢山の遊びがあるがここでは紙面の都合で省略したい。

### 7—3 子供たちは変わっていない、

変わったのは子供たちを取り巻く環境である。



ほどほどの川、山、谷、田園と子供たちにとってはこの上ない遊び場が用意された唐子。この中で子供たちは時には水門潜りや弓遊びなど危険な遊び、又かわいい金目玉（フクロウのヒナ）を救う話、時には喧嘩をしながら成長していく姿が描かれている。

そして現代の子供たちを取り巻く環境はどう変わったのか。昭和30年代を境に日本は経済成長（豊かさ）と引き換えに多くを失った、最たるものは公害問題であろう、川は

「天下のゴミ捨て場」となり子供が遊べる状態ではなくなった、美しい里山はガスの普及により燃料と堆肥の供給という役目を終え荒れ放題になっている。

農業では耕運機の普及によりたい肥のない農家へ、そして農薬と化学肥料へ、こうして豊かだった自然環境は失われ遊び場を失った子供たち。そして同時に進行したのが校内暴力、学級崩壊、深刻ないじめ、など……

こうした現状は深刻な自然破壊と無関係ではないと思う。そしてその反省から政府、各種環境団体、ボランティアなどのたゆまぬ努力によって自然環境は大きく改善されてきた。しかしまだまだ陰湿ないじめによる昔は考えられなかった子供の自殺などが報道されている。

私たちが子供のころは、1年生から6年生まで群れをなして遊んでいた。水泳《水浴び》や竹馬の作り方などもほとんどの遊びは先輩や兄から教わった。こうして色々な遊びが受け継がれてきた。

私たちの子供時代の遊びを振り返ってみるとそのほとんどが今は禁止または途切れていることである。

私たち大人が子供に望むのは「丈夫で逞しく育ててほしい」と言うことではないだろうか？

「天の園」の時代の子供たちの遊びを参考にもう一度考え直してみる必要があると思う。

**写真上**は槻川上流 ダイビングをする子供

**写真下**はおとうか橋 昔子供の遊んだ川のいたる所に設置されている。



## 8 時代背景

### 8—1 養蚕について

母かつらが、夫をなくしてからの仕事は主に養蚕でした。

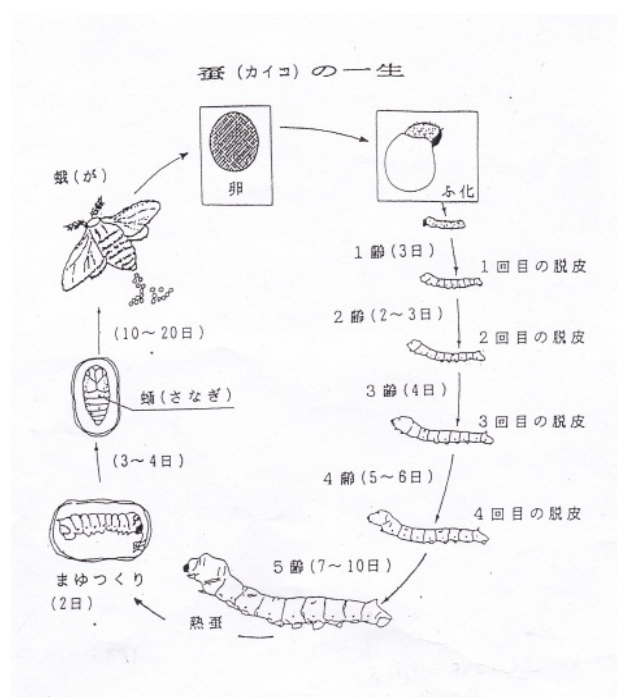
養蚕はすぐに現金収入になり、農家の副業として盛んに行われていました。本家の馬橋家では『層楼養蚕』の大きな額を掲げて生活のため率先して養蚕を行っていたとおもわれます。蚕は古くから行われていましたが、開国から、生糸や蚕種が外国への大きな輸出商品となっていきました。当時の日本全体が養蚕によって動き出した大きな変革の時代であったと思います。政府が造った官営の「富岡製糸場」、民間の製糸場も多く造られました。生糸を運ぶための鉄道も発達しました。しかし今では化学繊維の普及、生活の変化などにより製糸業も衰退していきます。

養蚕は年4回～5回ほど飼育される。その呼び方は飼育する時期に応じて春蚕（ハルゴ）は5月初め頃、夏蚕（ナツゴ）は7月初め頃、秋蚕（アキゴ）は7月末頃、晩々（バンバン）は9月初め頃です。

ここで蚕の一生を考えてみよう。蚕は4回脱皮すること、また短い間に非常に大きく（約10,000倍）なることで知られている。食べ物は桑のみである。繭を作る乾燥した場所が必要であることで民家は二階家とした。養蚕の時期になると日常生活の場も占領されてしまうほど、家の中は「お蚕様（おこさま）」として扱われた。蚕に食べさせる桑を最初は巾数ミリ程度に刻みその後桑摘みした葉を、最後には枝ごと切り取ってきて与える。調査資料によると



取り壊し前の本家



一齡35回、二齡23回、三齡23回、四齡23回、五齡23回でおおよそ合計137回程度になるようです。尚、五齡で蚕が食べる桑の量は四齡までに対し約3倍と極端に多くなる。この様子は蚕が音をたてて勢いよく食べること、母かつらや喜美子姉さんの忙しさからも十分わかります。大きくなると保の家のように人間の寝る場所も隅のほうへ移されてしまうのです。都幾川へむしろやかごなど私たちが保と同じように洗いに去了きました。

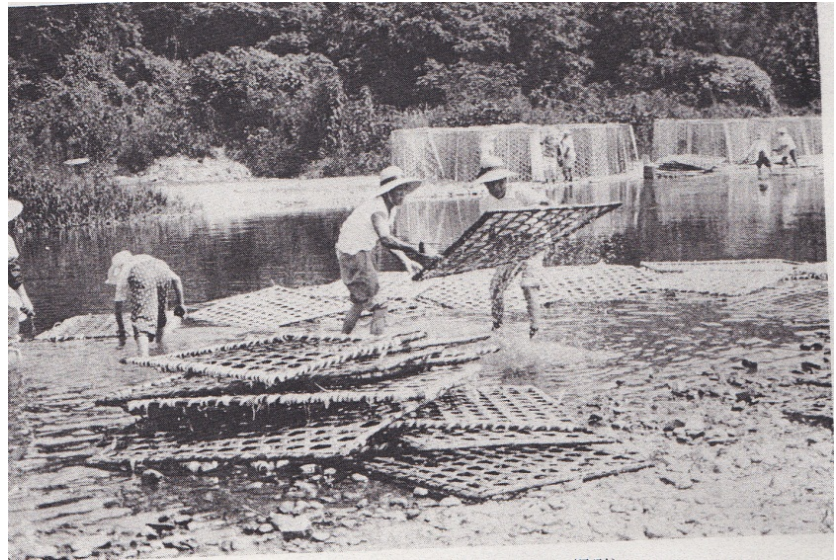
衰退したとはいえ私達が子供の頃までは、ほとんどの農家では蚕を飼っていました。戦後の生活の現金収入に大きな役割を果たしていたのです。シジュウカラおばあのように機織りも行われていました。私の祖母も蚕を飼い、糸を紡いで機を織っていました。着物に仕立て、娘の嫁入りの時に持たせたそうです。養蚕から、

着物に仕立てるまで個人でやっていたのです。

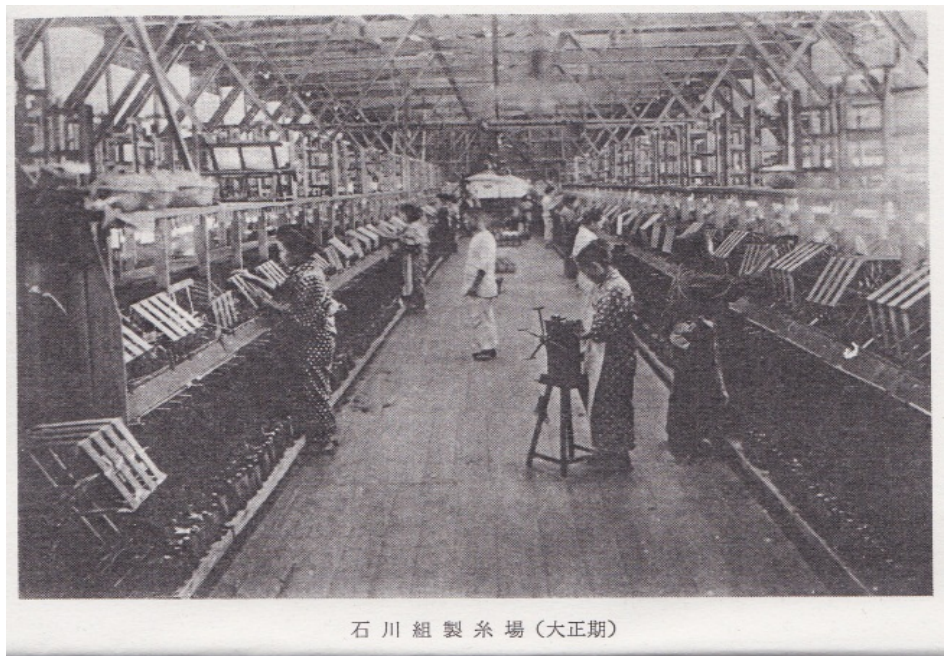
当時の頃までの女性には、かつらのようにひたむきに生き抜く力強さを感じます。今では養蚕をする家はこの近辺では殆んど見られなくなりました。

参考として、久仁子姉さんが中

学に入れず、女工として勤めた豊岡町の丸川製糸工場（石川組製糸工場）の写真がありましたので掲載します。「天の園」に続く“大地の園”では久仁子姉さんのこともたびたびでてきます。



養蚕のかごを洗う農家の人



石川組製糸場（大正期）

## 8—2 道路と交通（保の時代）

唐子を舞台にした、天の園の児童文学が、打木村治によって創作されたのは父河北徳三郎が脳出血で倒れ3歳の時、母（かつら）の実家がある比企郡唐子村に、一家で移り住んだのが始まりです。三重県（鳥羽）方面より松山への鉄道路線は、当時の鉄道は、東松山（唐子）へ行くには鴻巣駅を利用するのが一般的な経路だろう、なぜなら、当時の東武鉄道路線は、汽車（今の電車）は、どうなっていたかを調べると、池袋～



川越間（1915）大正3年5月（保、10歳）に、さらに坂戸まで伸びたのは（1917）大正5年10月そして東松山駅（武州松山駅）ができたのは約7年後の（1924）大正12年である。さて河北家は、鴻巣駅より武州松山までの乗り物は、馬車や人力車である。広辞苑によると人力車は人を乗せ車夫が引いて走る1人乗り、もしくは二人乗り、の二輪車、腰掛、座席、梶棒、幌、などから成り、1869年（明治2）和泉要助など3人により発明されたもの、となっている。天の園の本の

中では二人力、人力車のことも記している。二人で同時に力を合わせて引くものかと想像していたが、本をゆっくり読み返してみると、次のように書いてあった。綱を肩から脇腹へひと巻して、道が平らなときは、先に突っ走り、下りにかかると後ろへ回って、後へ引っ張る、綱引き、ぬかるみがあると、素早く



横に回って車の横揺れを防ぐためだと、記されていることで豪華仕立ての人力車であることが分かった。ここに明治時代のころの人力車の写真を見つけたので掲載します。「天の園」に出てくる、人力車は自家用であった、一般には車は個人持ちで、車夫は紺モモヒキ、ハラガケ姿で、手ぬぐいで鉢巻をし、地下足袋をはいて走りながら車を引いた。乗客は、金持ち、役人、医者、一般の人では利用出来なかったのでは、（当時の貨幣100銭が1円、大正から昭和の時代でタクシーのことを円タクと、いった話もある）当時の一般の乗り物は、乗合馬車（現、バス）明治の初めごろから、松山より四方に通ずる主な街道にはこの馬車が走っていたようです。

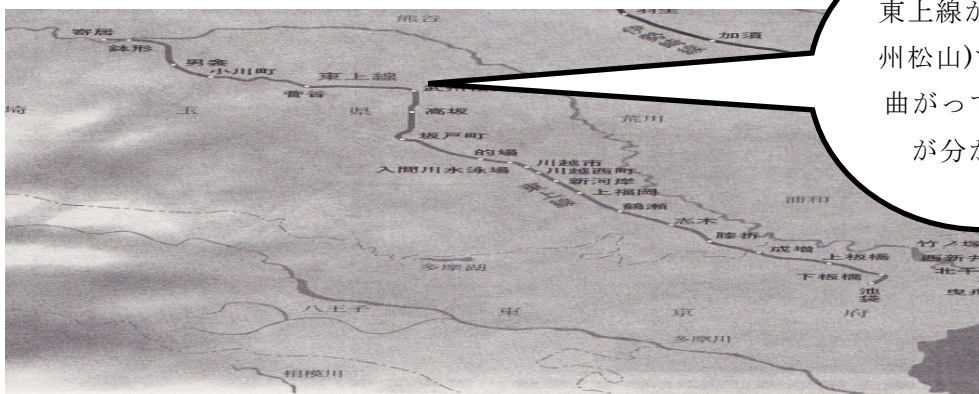
「天の園」の舞台となった明治末ごろには当然走っていた。東松山史によると松山市内～上唐子（10銭）松山～川越（25銭1日10往復）、松山～熊谷（20銭、1日8往復）、松山～鴻巣（25銭1日14往復） 鴻巣への便が予想より多い

のは鉄道が、鴻巣駅には開通していたため東京方面へ行くために利用されたものと思われる。尚、保が川越中学受験帰りに、タテ馬車に乗った思い出がある。タテとは停留所（タテバ）のことで停留所を経由する乗合馬車のこと。



ここで「天の園」の本では光忠兄さんが保、小学2年の時坂戸駅まで汽車を利用したとあるが実際坂戸まで開通したのは大正5年10月で保13歳《5年生か》であり違うようである、しかし東松山駅（当時武州松山駅）が出来たのは約7年後の大正12年10月となってしまった。大変遅れた原因は、はっきりとは言い切れないが東武鉄道百年史や近隣の市史等から推察されるには、当初坂戸から小川方面へ玉川経由を予定していたことと、東松山経由と決まってからも高坂地内において東線（坂戸上吉田から高坂田木）とするか西線（坂戸入西、和田から高坂田木）にするかで種々問題があり着工が遅

最終的にはこの問題は現在線路のある東線に決定した。



東上線が松山(武州松山)で大きく曲がっているのが分かる。



## 9 自然散歩

### 9-1 岩殿散歩

保少年は久仁子姉さんよりサンキチとつけられている。サンキチとは散歩キチガイのことである。我々メンバーもサンキチと同じコースを散歩してみることにした。

本家の前を右に回りすこし行くと八幡神社脇にでる。そこから街道を石橋地区に進むと金谷街道の始



点となる山田米店に来る。そこを右に曲がり川北地区を少し歩くと都幾川にあたる。土手を上り川辺に向かって少し進むと馬頭観音がありここが旧道であったことがわかる。橋に戻り都幾川を渡った後、文学上保はふゆ子と大平地区經由ネコ坂を越えて岩殿山へ行ったとなっているが、我々は一般的な岩殿山へのコースの葛袋經由高坂カントリークラブ脇を通って岩殿観音へと向かう。明治末の頃は岩殿山（物見山）も写真のように見えたと思われるが今は家、学校等



大正中頃の岩殿山

で当時の面影は見られない。岩殿の入口には弁天沼、阿弥陀堂の板石塔婆があり歴史を思い出させてくれる。岩殿の門前町は今では一軒も当時の商売をやっている家はないようであるが、観光PRのため昔の店の名前または屋号を木板に書いて案内をしてくれている。岩殿山正法寺はその正面にどんとかまえており、その脇を過ぎると本日の行き先の岩殿山に着く。この山からは明治時代には八州が見渡すことが出来たようである

が今では一部しか見ることが出来なくなっている。我々が訪れた頃ちょうど大きくなりすぎた樹木を切り倒していたので再度昔の眺望が見られるものと期待しています。

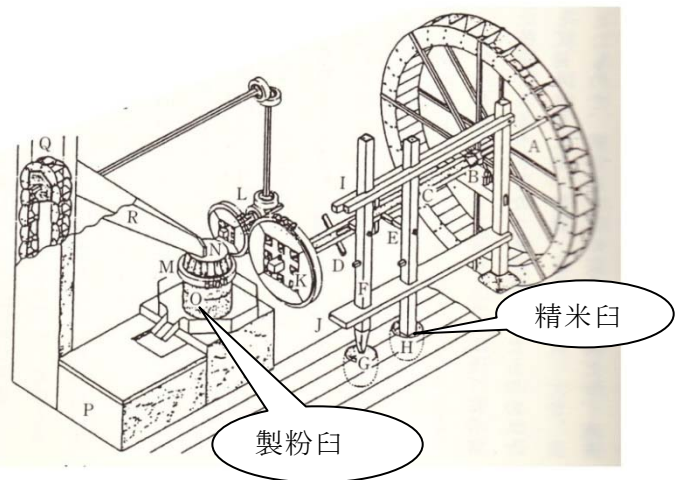
岩殿山のすぐ下にはただ一軒となってしまった昔からの日の出家（文学上ではおひさ茶屋？）がある。この店は現在五代目で創業約150年とのこと。昔は天秤棒をかついで川越方面へ材料（魚等）を買に行き観光客相手にバラック（店の人の言葉では風で飛んでしまうような家）で店を開いていたとのこと。すなわち保も一代目または二代目の店の主人とは何度も会ったと思われる。今日はここで昼食をとり、すこし昔の話を聞いた後本来は保と同じ元の道を通って帰る予定であったが昔大蛇が出ると恐れていた雪解沢を經由して帰ることにした。

## 9—2 ロマンを求めての旅（ヒゴイの旅路）

ロマンを求めて我々全員で嵐山の水車小屋まで歩いてみようということになった。唐子を出発し村道（現在は市道）を少し歩くと月田橋の近くへと着く。川にはまだ巨岩大石は見当たらないが明治43年の大洪水の影響で当時はあったかとも思われる。この辺りが行程の約半分であり、保たちはこの付近で昼食をとったものと思われるが、我々は小休止のあと県道を大野方面へ鎌形地区に。ここより右に入って都幾川に向かって少し歩くと水車小屋のあった場所に着く。事前にある程度予想はしていたものの現地に着くと水車小屋はもちろんのこと水路、ヒゴイの〈夕やけ〉が泳いでいた大きな池も見当たらない（右の写真のあたり）。この付近が水車小屋だったのかと自分を疑う気持ちになってきた。ただ脇を流れる都幾川を眺めると大きな石が川の中に見られること、川岸の美しさはまだ残っているので少し安堵させてくれた。

我々は大きなロマンを求めて旅をして来たが、都幾川からの水路跡がわずかに見られたが、多くのものが消えたり、変化しているのを目の当たりにすると明治は遠くになったなあつくづく思った次第でした。

唐子の水車、武蔵嵐山の水車とも地形からして流し掛け水車であったと思います。水車の使用目的は「天の園」に出てくるように、主に農事用の精米・製粉（右の写真）であるが、その他としては鉱業関連、紡績関連、製糖関連にも使われていたようです。又、さらに古くは油絞り、酒造りにも使用されていたようです。



## 10 まとめ

私たちは「天の園」を読み、その舞台である唐子地区を中心とした自然を観察しながら歩き、多くの関係者の皆さんと対話して、いろいろ学ぶことが出来た。

(1)「天の園」の時代は、自然が生き生きとしており、その自然に包まれた子供たちは、輝いていたようであった。現代は多くが開発されているが、その中でも都幾川、高本山、秩父の山などその時代の風景を美しく残している。そして、その風景を見つめる雲は昔と変わらず、いろいろな変化を作って私たちを楽しませてくれている。



ちやぶ台を囲む保の家族

(2) かつらの保や子供たちへの愛情、子育ては、多くの所で表現されており、微笑ましく読む所、涙しながら読む所、などいろいろ感動させられる所が多かった。これから、子供や孫の子育て、教育に参考になるところが多かった。遊びや友人たちとの協力、付き合いなども子供の成長に大切であると思われた。

(3) 養蚕や交通事情など取り上げたが、忙しい中、不便な中でも助け合って、楽しく取り組んでいくことが大切だと言うことが教えられた。

(4)「天の園」のコースを歩くと小説の中を歩くようで、いろいろなシーンを思い出し、ロマンを感じ、時のたつのも忘れるような楽しい時間に浸ることが出来た。



「保と源八」ゲンパチは母親が亡くなった夜、ひと晩木の上で泣き明かした。

## 11 今後の取り組み・お礼

(1) 「天の園」を学んで、私たちが現代社会で忘れていたことを多く思い起こすことが出来た。これからの子育てに役立てていきたい。また多くの人にこの本の良さを分かってもらうように薦めていきたいし、「天の園」の会の活動にも協力していきたい。NHKの朝ドラに採用されるように活動中とのことであるが私たちもできるだけ応援をしていきたい。

(2) 平成24年度より動き出している、埼玉県の「川の再生プロジェクト」に



川の再生プロジェクト完成予想図《鞍掛橋周辺》

(月田橋～中井堰)が取り上げられている。この区域には「天の園」の舞台も含まれており、ウォーキングルートの整備、案内標識の更新、など「天の園」のPR活動について考えていきたい。「美しい自然は」この本のテーマであり、地球環境のテーマでもあります。私たちの世代から次の世代まで継続できるように引き継いでいきたい。

(3) 今回の課題研究に多くの方のご指導、ご協力を頂きました。特に「天の園」の会の皆様には小説の解説やルートの案内、紙芝居の公開、資料の提供など多くのご指導いただき心からお礼申し上げます。

### お世話になった方々

「天の園」の会の皆さん  
東松山県土整備事務所  
東松山市商工観光課・東松山市水道課（唐子庁舎）

### 引用文献

小説「天の園」、  
東松山市史  
東松山・比企百年史  
あかね会編 ふるさと唐子「天の園」にみる豊かな自然  
あかね会編 「天の園」にみるすてきな人びと  
「天の園」の会編 「天の園」の会活動報告